

## 置かれた場所でしなやかに

丸山 勉

### 【聖書】 コリントの信徒への手紙一 7章17節～31節

おのおの主から分け与えられた分に應じ、それぞれ神に召されたときの身分のままで歩みなさい。これは、すべての教会でわたしが命じていることです。割礼を受けている者が召されたのなら、割礼の跡を無くそうとははいけません。割礼を受けていない者が召されたのなら、割礼を受けようとははいけません。割礼の有無は問題ではなく、大切なのは神の掟を守ることです。おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい。召されたときに奴隷であった人も、そのことを気にしてはいけません。自由の身になることができるとしても、むしろそのままいなさい。というのは、主によって召された奴隷は、主によって自由の身にされた者だからです。同様に、主によって召された自由な身分の者は、キリストの奴隷なのです。あなたがたは、身代金を払って買い取られたのです。人の奴隷となっではいけません。

兄弟たち、おのおの召されたときの身分のまま、神の前にとどまっていなさい。

未婚の人たちについて、わたしは主の指示を受けてはいませんが、主の憐れみにより信任を得ている者として、意見を述べます。今危機が迫っている状態にあるので、こうするのがよいとわたしは考えます。つまり、人は現状にとどまっているのがよいのです。妻と結ばれているなら、そのつながりを解こうとせず、妻と結ばれていないなら妻を求めてはいけません。しかし、あなたが、結婚しても、罪を犯すわけではなく、未婚の女が結婚しても、罪を犯したわけではありません。ただ、結婚する人たちはその身に苦勞を負うことになるでしょう。わたしは、あなたがたにそのような苦勞をさせたくないので。兄弟たち、わたしはこう言いたい。定められた時は迫っています。今からは、妻のある人はない人のように、泣く人は泣かない人のように、喜ぶ人は喜ばない人のように、物を買う人は持たない人のように、世の事にかかわっている人は、かかわりのない人のようにすべきです。この世の有様は過ぎ去るからです。

### 【序】「宗教には懲りすぎるなよ」

私はいわゆるクリスチャンホームの家で生まれたわけではありません。大学1年生だった時に教会に通い始め、半年ほどたった秋にバプテスマ(洗礼)を受けました。それまで日曜日の朝は昼頃まで寝ていた私が、人が変わったようにいそいそと朝早くから教会に通うようになって、当初私の親は私のことをいぶかしく思ったようです。

ある時、私が父親に、今度バプテスマを受けることにしたい、と言ったら、父は少し心配そうな顔をして言いました。「キリスト教や教会が悪いところだとは思わない。でもあまり宗教に懲りすぎるなよ」と。その時は「うん」と言ったと思います。でも、今私は牧師になってしまいました…(!)。そして不思議なことに、また感謝なことに、私の両親もその後、クリスチャンになりました。

「宗教には懲りすぎるな」。それは、ある意味、一般的な日本人の親の、真面目な親心があるのだと思います。そこには、最近の新興宗教団体に対する不信感のようなものもあるのでしょうか、更には、「神頼み」の人生などというのは、自立した生き方と矛盾するもの

だ、という考え方がどこかのあるように思います。ですから、宗教というものは、自分の生き方に利用出来るものを取り込むのは良いけれども、**宗教に利用されるなんていうのは、情けない生き方であり、不自由な生き方だ**という考え方は根強くあるように思います。

けれども、私は、**イエス・キリストを信じて、不自由な生き方を強いられているか**と言うと全くそうは思いません。むしろ逆なんです。**イエス・キリストによって捉えられていると信じて**ことができる人生は、**深いところで解き放たれた人生、心の自由を与えられている人生だ**と思っています。

## [1] 社会改革よりも魂の改革

ご一緒に読み続けています「コリントの信徒への手紙一」は使徒パウロの手紙ですが、今日開いた7章の中でパウロは、ちょっと驚くべき言葉を語っています。それは奴隷の身分であったクリスチャンたちに、(奴隷の身分であることを)**「気にしてはなりません」と**語っています。口語訳聖書でも**「それを気にしないがよい」と**なっていました。

このコリントの港町には**沢山の奴隷たち**がおり、その方たちの中でキリスト者になった人々がこのコリント教会で礼拝を守っていました。ただ当時の奴隷は酷い弾圧を受けていたという訳ではないようです。(家事や家庭教師などもしていた)。

けれども現代であれば、この言葉(「気にしてはなりません」)は、権力側に利用されてしまう言葉ではないか、と思われてしまいかねません。つまり**階層や格差の容認の言葉**だと。**キリスト者は弱者の側に立たなくてよいのか?**と。けれども、私はパウロはそのような批判を受けることを百も承知で、ある意味、**社会改革**と言うより、**もっと次元が違う、魂の改革**のことを語っているのではないか、と思います。奴隷である現状を「気にするな」と言っているのです。これは言い方を変えれば、「**それに拘ることから自由になりなさい**」ということだと思えます。

そのような表現をパウロは、この第一コリント7章の中で、所々で出てきます。まずは、7章前半の、**結婚と独身を貫く生き方のどちらが信仰者として相応しいのか**、ということについても、7節にこうあります。「わたしとしては、皆がわたしのようになりてほしい。しかし、**人はそれぞれ神から賜物をいただいているのですから、人によって生き方が違います。**」

そして、奴隷については、先ほど申しました21節に、「そのことを気にしてはいけません。自由の身になることができるとしても、**むしろそのままいなさい。**」と言いますし、25節以降の、まだ未婚の者たち(むすめ)に対しては、「(私の意見を言うと)、**人は現状にとどまっているのが良いのです**」と語っています。

パウロは**勇ましいことは言わない**のですね。この世の中に対し、現状打破、革命家のように生きることがキリスト者なのだ、とは言わないのです。むしろ、**あなたは今の生活を受け入れて、つとめて落ち着いた生活ををしなさい**、と言っているようです。なぜ、パウロはそのよ

うなことを(ある意味、肩透しを食うようなことを)言うのでしょうか？それは、パウロは、それぞれが置かれている環境や身分と言うものを無視するのではなく、かと言ってそれだけに捉われるのではなく、その向こう側を見つめているからだと思えて仕方ありません。それは一体何でしょうか。

## [2] 十字架によって神の子とされて

今日、招きの聖句として読んで頂いたのはガラテヤの信徒への手紙の中からの言葉でした。同じパウロの手紙の一節です。この言葉は、昔からよくバプテスマ式の際にも朗読された言葉だと言われています。ガラテヤ書3:26～28をお読みします。

「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。バプテスマを受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」。

これは本当に素晴らしい言葉ですね！ 私たちを色々なくしがらみから解き放ってくれる言葉です。「私をキリストはしっかりつかまえて下さった。私は今、神の子とされたのだ。そうであるなら、私が何人であることも、男や女であることも、自由人であろうが奴隷の身分であろうが、そのことが私の一番大事なことではなくなった！」と言っているのです。イエス様は、「私、私、俺、俺」という自己絶対化の頑なな心の有り様から緩めてくれ、自由にしてくれるのです。なぜなら、私たちは皆イエス様という衣で覆われているからです。

7章22節からはとても大切な言葉です。

「というのは、主によって召された奴隷は、主によって自由の身にされた者だからです。同様に、主によって召された自由な身分の者は、キリストの奴隷なのです。あなたがたは、身代金を払って買い取られたのです。人の奴隷となってははいけません。兄弟たち、おのおの召されたときの身分のまま、神の前にとどまっていなさい。」

ここでのポイントは「あなた方は身代金を払って買い取られたのです」という所だと思います。私という存在を、責任を持って買い取って下さった方がいると。ご自分の独り子を十字架におかけになり、私が支払うべき罪の罰の代償を支払い抜いて下さった神様です。ですから、今や、私たちは皆「神様の子」とされているのです。ただ十字架のゆるしの恵みの故に、私たちはもう自分自身そのものをこのお方に明け渡しているのですね。私たちは、迷いやすく、弱い羊の一匹一匹ですが、まことの牧者・羊飼いであるイエス様が、いつも私たちから目を離さずに、その神様の囲いの中に入れて下さるからです。

ですから、パウロは大胆に言うのですね。「兄弟たち、おのおの召されたときの身分のまま、神の前にとどまっていなさい」。そう、私たちは、この“召して下さった”<神様の前に>とどまっていればいいのですね。

### [3] この世の有様は過ぎ去ること

このイエス様の十字架ともうひとつ、パウロが見据えていたもの、それをハッキリとこの手紙の中で書いていると思います。それは、この世の終末であり、キリストが再びおいでになって神様の救いを完成して下さる大いなる希望の日です。

26 節で「今危機が迫っている状態にあるので…」、また 29 節「兄弟たち、私はこう言いたい。定められた時は迫っています」、そして 31 節でさらに決定的な言い方をしています。「世の事にかかわっている人は、かかわりのない人のようにすべきです。この世の有様は過ぎ去るからです」と。

「この世の有様は過ぎ去るからです」—捉え方によっては、厭世的になりかねない言葉です。けれどもクリスチャンは世捨て人になれと言っているわけではありません。むしろパウロはこの世の只中で、35 節の言葉を見ると、「品位ある生活をさせて、ひたすら主に仕えさせる」、そのために私は語っているのだと言っています。

<終末の希望>を信じる者は、現在の生活に責任と誇りを持って生きることが出来るのです。決してこの世を諦めない、捨てない。なぜかと言えば、私たちはやがて御国で永遠に生きるお約束を頂いています。その永遠に比べれば、私たちの一生などというものは、ほんの一瞬に例えられるかもしれません。そうであれば、その一瞬を、与えられた一瞬として、誠実に生きて生きたいと思わされます。

そうです、私たちは、主イエス様の復活の光に照らされているからこそ、今置かれている場所、環境、境遇、人間関係、それを、神様からの贈り物として捉えるまなざしと喜びを与えられるのではないのでしょうか？

### [4] キング牧師の戦いを支えたもの

今年はそのマーチン・ルーサー・キング牧師の死後50年の記念の年だそうです。39歳で死なれましたから生きていればまだ89歳なのですね。今月の4月4日が、銃弾に撃たれた命日で、ニュースでも大きく取り上げられていました。殊に、9才のお孫さんの女の子ヨランダちゃんが「私の祖父には夢があった。それは4人の幼い子供たちが肌の色ではなく、それぞれの人格によって評価されることだった。そして私にも夢がある。それは銃がこの世界からなくなること」とスピーチしていました。あの有名な「I have a Dream」を用いながらのスピーチは喝采を浴びました。

キング牧師のあの「I have a Dream」のスピーチ、演説は、ある意味この世界を変えるほど、心に深く訴える内容を持つものですが、キング牧師は、決してラディカルな人ではなかったと言われています。

最近キング牧師のある論文を読んでいてハッとさせられたことがありましたので、それを最後にお話したいと思います。

キング牧師はあのワシントン大行進で6つの夢を語りました。

一つ目は、アメリカの独立宣言の「すべての人は生まれながらにして平等である」が真実であることが証明されること。二つ目の夢は、元奴隷の息子たちと元奴隷主の息子たちが兄弟愛を持つこと。三つ目の夢は、人種差別と黒人への暴力が横行するミシシッピ州でさえも「自由と正義のオアシスに変貌する」という夢。四つ目の夢は、彼の四人の子どもたちが「肌の色ではなく、人格によって評価される」国に住むようになること。五つ目の夢は、黒人の少年少女と白人の少年少女が、兄弟姉妹のように手を取り合うこと。

そして最後に六つ目の夢として語られたのは、旧約聖書のイザヤ書40章からの引用で、いつの日か、深い谷や高い丘、険しく曲がりくねった道が平らになることを見ることでした。バビロン捕囚からの解放の預言を、この差別的な社会状況の変革を重ね合わせての「夢」でした。

キング牧師の戦いと言うのは、或る意味とても落ち着いた戦いだったようです。もちろん腕力は行使しない非暴力です。その根っこにあったのは「祈り」です。「神様、あなたが働いてください」という祈りです。

そのキング牧師の戦いについて、大橋 稔先生という研究者の論文をネットで読んだのですが、その先生が「注目したい事」としてこの様なことを記していました。

「キング牧師は、白人社会に仲間入りすることを目指すのではなく、既に白人が享受している成功を追い求めるのではなく、黒人が白人化することを夢として語っているのではない。黒人であることが否定されるのではなく、黒人であることを棄却しなければならないのではなく、平等な権利を有する一人の独立した合衆国市民として黒人であり続けながら、個人の内面が尊重される社会を夢見ているのだ。」

一人ひとりのパーソナリティー(人格)が、誰か他者、或いは社会構造によって排斥され、痛めつけられることは決してあってはならない、それは、黒人とか白人とか肌の色とかそのようなことは何の差別材料になるはずはないのだ、とキング牧師は「黒人であり続けながら」戦ったのです。しかも最も弾圧が酷かった合衆国南部に身を置きながら、民衆と共に、です。

キング牧師がしたこと、それは、社会革命をラディカルに起こすことではなく、今置かれた場所、置かれた環境で、神の言葉、イザヤ書の預言を信じたのです。決してキング牧師自身が作った夢 Dream ではないのです、神様のヴィジョンに確信を持って立っただけなのです。彼は夢を語る際、アタマに<one day>と語りました。

「いつの日か」。—これこそ、パウロが語る<定められた時>です。必ずその日はやってきます！それはこの地上を超えた「かの日」なのかもしれませんし、しかし、その完成の日を信じて、そこから逆算して今を誠実に生きることが、信仰者の生き方なんだと思います。これは、正に「自立した」生き方ではないでしょうか。

## [結] しなやかな信仰を

私はそれなりに説教題を付けることには毎回頭を悩ますのです。今日は「置かれた場所(場所)でしなやかに」という題をつけたのですが、渡辺和子シスターのエッセーのタイトルのよう(場所)ですけれども、あえて「しなやかに」としたいと思ったのです。

「しなやか」。細く見えて、絶えず風に揺らされても、まっすぐに天を指して立つ竹のようなしなやかさを持ちたいと私自身思います。又、「しなやかさ」は「打たれ強さ」と言い換えてもいいのかもしれませんが。柔道でまず学ぶことはきちんとした(場所)転び方(受け身)ですよね。床に叩きつけられても下手な怪我をしない。ボクシングの試合でも、無闇に打つのではなく、相手に打たせることが大事らしいですね。

私たち、神様が置いて下さった場所がそれぞれにあると思います。そこでしなやかに、自由に、天を見据えながら生きてゆきたい。

その私たちの地上の生には、神の独り子として、私たちに代わってこれ以上ない試練に遭われ、歩み抜かれた主が同伴されているのです。感謝です！

その主イエス様は、私たちに今このように語ってくださっています。

「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」。(ヨハネによる福音書16:33)

祈ります。

神様、私たちは自分で選んでいるようでいて、実は私の命そのものも、環境も、あなたが私のために用意して下さったものだと知りました。決して平和な日々だけではありませんが、十字架と復活の主が、私を知り、私がこの地上で誠実に生きる力と信仰を与えて下さいます。どうか、終わりの日の大いなる希望に支えられて、それぞれに置かれた馳せ場を、しなやかに生きることが出来ますように。

救い主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。